

聖書：I コリント 15：50～58

説教題：いつも主のわざに

日時：2017年4月16日（朝拝）

コリント人への手紙第一第 15 章。復活について語られている聖書の中でも有名な章です。ここではキリストの復活と信者の復活の関係が述べられています。この章の 3～5 節には「最も大切なこと」として福音のエッセンスがまとめられていますが、そこにキリストの復活の事実があげられています。4 節：「聖書の示す通りに、三日目によみがえられたこと」。しかし 12 節以降を見ると、キリストの復活が宣べ伝えられているのに信者の復活はないと主張していた人々がいたようです。そんな彼らにパウロはキリストが復活されたなら信者の復活も必ずあるということを 12～28 節にかけて語りました。この部分を一昨年 of イースター礼拝で読みました。では信者が復活するなら、その復活のからだとはどんなものなのか。そのことが 35～49 節にかけて語られました。特に 42～44 節で復活のからだは朽ちないからだであり、栄光あるからだ、強いからだ、そして御霊に属するからだであると言われました。この部分を昨年 of イースター礼拝の時に読みました。今日はその続きの 50～58 節、I コリント 15 章最後の部分を見ます。

ここで問題になっていることは何でしょうか。それはこれまでの話を通して死んだ信者のからだはキリストの再臨の日に栄光のからだに復活するということが分かったが、ではその日に生きている信者はどうなるのかということです。そのままのからだで天国に入るのか。まずパウロは 50 節でこう言います。「兄弟たちよ。私はこのことを言うておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。」 血肉とは私たちの今のからだを指す言葉です。この今のからだのまま神の国を相続するのではない。「朽ちるもの」が「朽ちないもの」を相続するのではない。ではどうなるのか。その時、生きている人たちはそこで一旦死んで、それから復活するのか。そうではない！とパウロは言います。51 節：「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな、眠ることになるのではなく変えられるのです。」 「眠る」とはここでは死を指しています。つまり主の再臨の日に地上に生きている人は死ぬのではなく変えられる。すなわち死を経ないで栄光の体に変えられるのです。ここを読んで思い起こすことは、前にある方がこの箇所について私に質問して来た時のことです。もしかしてパウロがここで言っていることは、再臨の日に生きているクリスチャンは死なないということなのか。死なないで直接新しいからだを頂いて天国に

入ることなのかと。そしてそうですよと私が答えると、その方は顔が喜びに満ちあふれ、「あ～是非とも自分はそうになりたい！生きている間に再臨が来れば死ななくて済むんだ～！」と非常に感動していたことです。もちろん今やクリスチャンにとって死は恐れるに足りない聖書で言われています。最近朝拝で読んだピリピ書 1 章 21 節にも「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」とありました。しかしその一方で、もし死なないで天国に入れるならその方がいい！と考えるのも良く分かります。そして実際にそういうことがキリストの再臨の日には起こると言われています。

さてパウロは 52 節で終わりのラッパが鳴ると、そのことが起こると語っていますが、そこには順番のあることが示されています。まず死者が朽ちないものによみがえる。そして次に「私たち」すなわちその日に地上に生きている者たちが変わられる。これと同じことが I テサロニケ 4 章 13～18 節にも語られています。そちらでは先に天に召された信者たちのことを心配していたテサロニケ人たちに対する慰めが語られていますが、パウロはそこで主の再臨の日にはまずキリストにある死者がよみがえると語っています。そういう意味で先に天に召された信者が主の再臨の日の特権にあずからないということはない。まず初めにキリストにある死者の復活が起こる。そして次に地上に残っている者たちが彼らと一緒に栄光の雲の中に引き上げられる。この順番は両方の箇所に共通しています。しかしそれは「一瞬のうちに」起こることと 52 節に言われています。ですから私たちが瞬きする間に起こることなのでしょう。一瞬の内に、その日、生きている者たちは栄光のからだに変えられる。53 節にあるように朽ちるものは必ず朽ちないものを着、死ぬものは不死を着る。そのような非常にドラマティックな変化が起こるのです。

このことは旧約聖書の預言の成就であると 54 節以降に語られます。まず 54 節で引用されているのはイザヤ書 25 章 8 節です。イザヤ書では「永久に死を滅ぼされる」と表現されています。意味としては同じでしょう。「死は勝利に飲まれた」とは、死が決定的に敗北したということです。死はこれまで人類史上すべての人を飲み込んで来ました。どんなに偉大な人も、どんなに美しく健康な人も、どんなお金持ちの人も、死の前には黙るしかありませんでした。ただ黙ってこの圧倒的な支配に服するより他ありませんでした。ところがその死が滅ぼされる日が来る。「死は勝利に飲まれた」と言われるような日が最終的に来るのです。

もう一つ 55 節ではホセア書 13 章 14 節から引用されています。「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか」という言葉は、それまであった死の力強い支配はもはやどこにもないということです。以前まで持っていた力を全く失っている。また「死よ。おまえのとげはどこにあるのか」というのは、死がそれまで「とげ」という言葉で象徴される痛み、悲しみ、害をすべての人にもたらして来たことを前提にしています。しかしそのとげがなくなった。56 節にこう続きます。「死のとげは罪であり、罪の力は律法です。」 少し難しい言葉です。前半はまだ理解しやすいと思います。たとえばローマ書 6 章 23 節に「罪から来る報酬は死です」とありますように、死は罪の結果としてこの世に入って来たものでした。すなわち死が恐ろしいのは罪に対するさばきという性格を持っているからです。ですから私たちの罪がキリストにあって正しく処理され、解決されているなら、死が私たちに訪れてもそこからとげは抜かれていると言えます。難しいのは後半の方です。「罪の力は律法です。」 言い換えれば「罪に力を与えるのは律法です」ということです。こう語ると、まるで律法が悪いかのように聞こえるかもしれませんが、もちろんそうではありません。ローマ書 7 章にありますように、律法は聖なるもの、良いものです。しかし人間の罪は神の御心、神の基準が示されると、その反対を行こうとします。正しいことが示されれば、それを行なおうとするのではなく、むしろ正しいことが示されると、じゃ、それと反対のことをしようではないか！と動く性質を持つ。こうして罪は律法によって益々自分の邪悪な性格、邪悪な正体を表し、一層の悪へと走るのです。

しかしその罪がキリストにあって処理され、解決されました！従ってクリスチャンにおいては死からとげが抜かれている！と聖書は語ります。この「とげ」という言葉は黙示録 9 章 10 節でサソリの「針」を表すのに使われています。本物のサソリは見たことがありませんが、もし暖かい地方に出かけてサソリに攻撃されたとしても針がなければ恐れる必要はありません。くつの中に入っているのも大丈夫です。あるいはきばのない蛇と同じです。山を歩いていてマムシにかまれたと思っても牙がなければ大丈夫。森を歩いていてスズメバチに襲われた場合もそうです。あの黄色と黒の顔をした恐ろしい生き物に追いかけられ、全身にまとりつかれても針がなければ何の害も私に及ぼせない。実にとげが抜かれた死はキリストにある者に対してはそのようなものでしかない。それは次の栄光の世界に入るためのドア、入口のようなものでしかないのです。57 節にあるように神は私たちの主イエス・キリストによって私たちに勝利を与えてくださいました。キリストは私たちの代わりに十字架にかかって、私たちの罪の代償を全部払ってくださいました。またキリストは私たちに代わって律法を完全に守り、100 点満点の義を与え

てくださいました。このキリストにあって私たちは最後の敵である死に打ち勝つ圧倒的な勝利の祝福に生きることができるのです。

パウロは最後に 15 章全体のまとめとして勧めの言葉を語ります。58 節：「ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。」 これまで学んで来た教理は私たちの日々の歩みを変革するものとならなければなりません。パウロは「堅く立って、動かされず」と言います。私たちは色々なことに振り回され、揺り動かされやすいものです。しかし私たちはこれまで拠って立つべき確実な基盤について教えられて来ました。将来が確固たるものであることを学んで来ました。この土台に立って、目標を見つめて、いつもたゆまず主のわざに励みなさい！とパウロは言います。ここの「主のわざ」とは何のことでしょうか。私たちの生活には「主のためのわざ」と、そうではない「自分のためのわざ」とがあるわけではありません。ローマ書 14 章 7～8 節：「私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のもので。」 I コリント 10 章 31 節：「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。」 主に救っていただいた私たちの人生は、もはや自分のためのものではなく、主のためのものです。そういう意味で私たちの生き方は一言で「主のわざ」と表現されます。その主のわざに励みなさい！と言われていました。なぜそのように勧められる必要があるのでしょうか。それは時に私たちの主のための奉仕はむなしく思われる時があるからでしょう。私たちは主のために働いて、いつもその実を見ているわけではありません。一生懸命、長い間仕えているのに、何ら望ましい結果が得られない。そう思うと私たちは失望しやすくなります。また単に願う結果が得られないことだけが問題ではなく、そこには「労苦」があります。これはくたくたになるほどの労苦という意味です。イエス様は「わたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい」と言われました。また「一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、云々」とも言われました。そのように歩んでも、それに見合った実りが見られない時、人間的には悲しく思います。自分のやっていることはムダなのではないかと恐れ、たまらない気持ちになって来ます。そしてそれよりももっと今ここで報いを実感できる生活を！もっと今ここで楽しみを味わえる生活を！と求めがちになります。それは突き詰めれば、32

節に記されていたような「あすは死ぬのだ。さあ、飲み食いしようではないか。」という生き方になります。明日はどうなるか分からない。明日は病気にかかり、死んでしまって、すべてが失われてしまうかもしれない。だから今、楽しむことを求めよう！苦しいことはなるべく避けて。今ここで自分を楽しませる生活を！と。

しかしこれまでパウロが語って来たことは、死の向こう側に神は究極的な幸いを私たちに用意してくださるということです。この世でどんな労苦があっても、主のためにかくたになることがあっても、それで終わりになることはなく、最後は全き救いの世界へと入れられる。栄光のからだを与えられ、永遠に主とともに住む最高に満ち足りた祝福の中へと導かれる。そして主は私たちの地上の歩みをすべてご覧になって、それに対する報いを与えてくださる。私たちはこの地上で主のわざに励んでも、その実を見ることなく、地上の歩みを閉じるかもしれません。しかしやがての天で、その自分の働きは主によって大きく用いられたことを知るようになるかもしれません。また仮に特別な何かにつながってなくても、主は私たちの地上の奉仕が主への愛と感謝からなされたことを見て、ご自身に対する愛の行為として喜んで受け取ってくださる。そして「よくやった！良いしもべだ」と評価してくださる。そのことを思うなら、私たちは人間の目に見えるところによって振り回されたり恐れたりするのではなく、むしろ堅く立って動かされずに、主のわざに励むようにと導かれるのではないのでしょうか。

具体的に私たちはどんなことをして行けば良いのでしょうか。神は一人一人にどのように地上の生活を歩むべきか、召命を与えておられます。そしてそれを果たすために必要な賜物も授けてくださっています。私たちは神と交わり、神に祈る中で、神が自分に与えてくださっている召しを受け止めて、その召しに従って自分をささげて行くべきです。それは一人一人違って良いのです。しかし私たちがそうしてそれぞれ神の召しに従って歩む時、それは必然的に神の御国の拡大とつながるはずでしょう。それは「御国が来ますように」という主の祈りと一致するものですし、また「御心が天で行なわれるように地でも行なわれますように」という祈りとも一致するはずですし、神の御名こそがほめたたえられるようにという第一の祈りともつながるはずです。私たちはこの観点に立って自分の生活を今一度見直してみたいと思います。自分は何のためにこの世を生きているのか。やがての日を見据えて「いつも主のわざに励む」という歩みに向かっているだろうか。

このイースターの日、神はキリストの復活によって私たちに永遠のいのちの世界を確実なものとして開いてくださいました。私たちはこの世にある間、様々な労苦がありますが、それが無駄であったということで終わることはありません。私たちのここでの生き方は、やがての天国での生活へとつながって行くものです。私たちの人生は死で終わるものではないため、むしろこの地上における歩みは、やがての御国における永遠の生活において永遠の意味と価値を持つことです。私たちは、私たちの罪と死の悩みを解決していただき、最後に完全に救ってくださる神に感謝して、与えられているこの地上の生を、「いつも主のわざに励む」ことへささげたいと思います。主はその私たちの歩みを見ていてくださいます。その主の御前で、私たちの主への愛と感謝を現して行くことができますように。そしてかの日には「良くやった！」と主からおほめの言葉を頂き、栄光のからだを頂き、栄光の御国に入ることを楽しみにしながら、今ここでの歩みをささげて行きたいと思います。